



ダビデの手紙を読むバト・シェバ Rembrandt

王の妻であることは幸せか否かは、昨今の報道で我々庶民の知るところになっています。ダビデの妻になったバト・シェバは、アヒトフェルの子、エリアムの娘で、ヘト人ウリヤの妻だったと記されています。ダビデは王宮の屋上から彼女が沐浴する様子を見て、彼女に欲望を抱きました。

彼女の肌は輝くように美しく、滑らかに見えたのです。夫ウリヤの留守のため、長い独り寝の日々になげやりな気分になって、自らの美しい裸身にも関心がなく、思いは遠い所へと飛んでいたのではないのでしょうか。物憂さによるしどけなさがあったことでしょう。美しい女性の儂げな、か弱そうな姿は、男性に「俺がなんとかしてやる！」的な妄想を掻き立てるものだとよく聞きます。きっとダビデもその思いに突き動かされたのでしょう。

人妻であることを知ったうえで、ダビデはバト・シェバを王宮に召し出し、床を共にしましたが、それで子を宿す事態に落ちいったのです。バト・シェバは父親の名前の記録もありますから、名家の娘で、ヘト人ウリヤの妻となっていました。ダビデはイスラエル人以外の多くの兵士を擁していたのです。ダビデはこの姦淫による妊娠を隠すために、一計をめぐらし、夫ウリヤを自宅へ戻させます。

ウリヤはヘト人(トルコ地方)ですから、異郷の人で、異教の神を信じていたかもしれません。けれども、バト・シェバを妻にしているのですから、能力も人望もある人物だったでしょう。彼は、ダビデに招かれて、一旦、戦場から都へ戻っても、戦場で野営している兵士たちを思い、自分だけ安穏な自宅へ戻れないと、勧めをきっぱり断る律儀な軍人氣質を持つ人でした。ダビデは計略に失敗し、自分の將軍ヨアブ宛に、ウリヤ自身に手紙を持たせ、「ウリヤを戦場の前線に出し、討死させるよう」命じました。ヨアブはダビデの命令を実行し、ウリヤは死にました。ダビデは姦淫、殺人の罪を犯しました。

ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだと聞くと、夫のために嘆いた。喪が明けると、ダビデは人をやって彼女を王宮に引き取り、妻にした。彼女は男の子を産んだ。ダビデのしたことは主の御心に適わなかった。(サム下 11:26) バト・シェバは夫の死を嘆きますが、夫を裏切ったことには無言のままです。王命に逆らうことは有り得ない時代でした。これを知った預言者ナタンはダビデのもとへ行き、糾弾、叱責します。

『ウリヤをアンモン人の剣で殺したのはあなただ。それゆえ、剣はとこしえにあなたの家から去らないであろう。あなたがわたしを侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたからだ。』主はこう言われる。『見よ、わたしはあなたの家の者の中からあなたに対して悪を働く者を起こそう。』(サム下 12:10)

ダビデは自分の非を認め、「私は主に罪を犯した」と言って懺悔します。ダビデはナタンによって主に執り成され、罪を赦されましたが、幼子は死にました。ダビデは夫も、子も失ったバト・シェバを慰め、彼らに再び男児、ソロモンが与えられました。バト・シェバは終始無言です。自分の運命を受容し、静かに生きています。けれども、しっかりと預言者ナタンに繋がっていたようです。ダビデがナタンを信頼していることをバト・シェバは分かっていました。ダビデが老境に入り、後継者争いが起こった時、ナタンはバト・シェバに、このようにダビデに訴え出て言いなさいと勧めます。

『わが主君、王よ、はしためにお誓いになったではありませんか。あなたの子ソロモンがわたしの跡を継いで王となり、わたしの王座につくと。』

サムエル記にはこの誓いの場面の記述はありませんが、最後に、バト・シェバは発言し、ダビデに、我が子ソロモンへの王位継承を認めさせ、王の妻としての最高の地位を勝ち取っているのです。